

## 日吉社及び山王神道の研究

佐藤 眞人

### はじめに

比叡山延暦寺の守護神として位置づけられてきた日吉社をめぐる、天台宗の延暦寺の僧侶が形作った思想・信仰の潮流である山王神道は、両部神道・伊勢神道・吉田神道と並ぶ大きな流派となった。近世には徳川家康を祀る東照宮の信仰と結びついて山王一実神道として発展を遂げ、また日吉社家においても延暦寺との軋轢や吉田神道との交渉のなか独自の展開を遂げていった。近年は山王一実神道や東照宮信仰の研究が大きな進展を見せている。しかしながら中世に限れば、山王神道は他の神道思想の流派と比較して大きく研究が立ち後れているといえよう。その原因の一つには『山家要略記』が特徴的なように、山王神道関係のテキストは諸本によって内容の出入りがあり、しかもその成立年代の手がかりもなかなか得られず実態が把握できないという困難な問題が横たわっていた。

そうした中でも、とりわけ久保田収氏は『中世神道の研究』（神道史学会 一九五九において、両部神道、伊勢神道と合わせて山王神道を取り上げ、『山家要略記』『耀天記』『金剛秘密山王伝授大事』など主要文献の成立や思想について考察し研究の基礎を築き上げた。また菅原信海氏の『山王神道の研究』（春秋社 一九九二）において『山家要略記』をはじめとする山王神道の代表的典籍の写本を蒐集し、錯綜するテキストを整理したことで、山王神道関係書籍の全容がようやく掌握可能となった。また『山家要略記』などの主要書籍さえ写本で閲覧するしかなかった状況も、『神道大系 日吉』『神道大系 天台神道（上）（下）』『続天台宗全書 神道1』などが刊行されて近年は研究の利便性が向上した。しかしながら日吉社の旧社家文書は、一部が発見され國學院大學、国立歴史民俗博物館などに所蔵されたが、まだ過半が所在不明であり、今後の調査が待たれるが、調査に及んだ範囲でも貴重な知見を得ることができた。

### 一 研究の目的と方法

山王神道の教説・思想が歴史的にどのような展開を遂げていったのかという課題については未だ十分に進展していない状況である。また山王神道は日吉社という神社と天台宗によって生み出されたものであり、そのためには思想的

研究だけでは日吉社の祭祀や歴史、天台宗の教学や歴史の掘り起こしを同時並行的に照らし合わせながら進めて行かないと多くの課題は解きほぐせないだろう。とりわけ日吉社は中世において伊勢神宮や石清水八幡宮・春日大社などと肩を並べて隆盛を誇っていたが、これらの神社と比較して研究の成果は非常に乏しく、それが山王神道の研究の大きな妨げとなっていると考えられる。

本論文では三部構成とし、第一部では山王神道の担い手として密接な関係を形作ってきた日吉社と天台教団の関わりを起点に遡って考察した。山王神道は教説としては鎌倉時代に集成されるが、山王をめぐる信仰や思想は日本天台宗の祖である最澄を起点として平安時代を通じて継承されてきたものであり、そうした信仰の史的展開の究明をせずして中世の神道のみ研究を注力することは大きな見落としをしてしまうだろう。さらに従来明らかにされていなかった日吉社の歴史展開を考究し、山王七社・北斗七星同体説という中世山王神道説一つの教説の形成過程を解明してみた。第二部では山王神道の主要な典籍やそれらの中に収録された縁起などの個別のテキストの成立の問題について論じてみた。第三部においては日吉社の祭祀について中世の祭儀の復元や、祭祀と神仏習合との関係のあり方をさぐり、また中世における日吉社の信仰の拡大を担ってきた巫覡の実態について究明することである。

## 二 成果

本論文での考察により以下の成果を得ることができた。第一部の第一章での考察の結果、日本天台宗の開祖である最澄において、日吉山王の信仰が存在したことは認めてよいだろう。しかしながらその内実については資料の不足もあり今後の課題となろう。また円珍においては積極的な山王信仰を持っていたことが複数の確かな資料から明らかであり、晩年においては本地垂迹説に等しい神祇観を表明していたことが解明された。第二章では山王七社のうち、大宮・二宮を除く五社がいかなる時代創祀されて山王七社として形成されたかを歴史的に考察した。その結果日吉社の歴史的発展段階を押さえることができ、そのことは日吉社の各社の祭神をめぐる山王神道教学の形成過程を解き明かす正確な指標として使えるものになったと評価できる。第三章は日吉社の主祭神である日吉大宮の多様な縁起を比較して日吉山王信仰とそれに伴う神道教説の歴史的な形成を解き明かすことができた。

また第二部では従来日吉社の古伝承を記録した平安時代成立の書とされてきた『日吉社禰宜口伝抄』が幕末維新期の偽書であることを論証した、これにより従来の日吉社研究、山王神道研究は仕切り直ししなければならないだろう。第二章は『山家要略記』の中でも最も成立の手がかりが豊富な『日吉山王靈応記』に

のうち『扶桑古語靈異集』を主体とする第三巻と伊勢神道の五部書との照合を行った。『靈異集』と五部書との部分的一致については既に久保田収が指摘していることであるが、詳細な比較によって久保田が指摘した『御鎮座本記』のみならず『倭姫命世記』『御鎮座次第記』『御鎮座伝記』との一致部分を指摘できた。これにより伊勢神道の五部書の成立から間もない時期から山王神道に伊勢神道が流入していたことになり、中世神道思想の交流のあり方を見直すための視点を提供できたと思う。第三章は山王神道教説の中でも代表的な大江匡房撰とする『扶桑名月集』その他について考察し、これが匡房の真撰ではなく、また書物の形で存在したものでないことを論証した。あわせて匡房仮託の教説の思想背景についてもある程度明らかにすることができた。第四章は山王神道の主要典籍とされ成立年代が不明瞭だった『延暦寺護国縁起』が延慶三年の成立であることを論証し、益信への大師号授与をめぐって起こった天台宗と真言宗の争論に際して、天台宗の諸宗に対する優位性と天台宗の守護神である日吉山王の靈威を朝廷に対して主張するために編纂された書であることを明らかにした。また本書は山王神道の主たる担い手であった記家の手によるものではなく、天台座主主導のもとに編纂されたものであり、それゆえ本書は山王神道説を秘説としてではなく、世俗社会に公開することを目的として編纂されたことを明らかにした。

第三部の第一章においては中世の祝詞資料を二種紹介し、中世の日吉祭(山王祭)の祭儀との対応関係を調べることにより、日吉社の祭祀の様相を説明した。第二章は神仏習合の中、日吉大宮の神は俗体の神として扱われ、天台宗の守護神と位置づけられながらも室町末期までは八幡宮や祇園社のような宮寺・精進の神にならず、魚鳥を献じ俗服を奉納する神であり続けたことを明らかにした。そのことは廿二社や公祭としての日吉祭によって朝廷祭祀の枠内に位置づけられていたことが作用していると考えられる。こうした事実の発掘によって中世神仏習合研究に新たな展望を持つことできた。第三章では日吉社において山王信仰を牽引する大きな担い手であった巫女・覲男について新出資料をもとに主として中世と近世におけるその実態を説明した。

今まで所在を把握できなかった日吉社家旧蔵書を探求して触れる機会を得て、日吉神社史研究および山王神道研究において多くの新知見を得ることができた。日吉社や山王神道について未だ総合的・網羅的に論じられる段階ではないが、これらの研究により今後研究を進めるにあたっての足場と方向性を築くことができたと考える。